

大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

巨大なマガキの化石

冬が旬のカキは、「海のミルク」とも言われ、栄養に富み美味しいことから、洋の東西を問わず古くから食用にされてきました。カキの仲間大きく「グリフェア科」と「イタボガキ科」に分かれます。そして、私たちが食用にしているカキは、このイタボガキ科の総称です。

カキの仲間は、中生代三畳紀の始め頃（2億4500万年前）、ホタテガイ類から出現したと考えられています。そしてイタボガキ科のカキは中生代白亜紀の終わり頃、原生種のように岩盤などに固着して生活するようになったとされています。食用にされているのは、イタボガキ科のなかでもマガキ（真牡蠣）*Crassostrea gigas* が主で、養殖され一般に出回っているものはほとんどがマガキです。マガキは、日本各地の防波堤や潮間帯付近の岩礁、干潟の砂礫などに付着して生活しており、日本から中国にかけて広く分布しています。マガキの大きさは普通長径が3cmから12cm程度ですが、北海道のサロマ湖などにはナガガキ、エゾガキと呼ばれる長径が30cmにもなるカキが生息しています。しかし、これらの大型のカキも種としてはマガキに属します。ナガガキ、エゾガキは寒冷な海に適応した型で、泥底の海底に生息しています。



写真は、大垣市で見つかった巨大なマガキの化石です。殻長が50cmもあり、非常に大型で見事なものです。新幹線の橋梁工事で地面を掘り下げたときに発見されたとされていますが、正確な場所や、発見時の状態については不明です。大垣市内では、土木工事に伴って貝殻

が見つかることがあり、船町辺りでは広く貝殻層が分布していることが知られています。また、船町には貝殻橋という橋があることから、こうした状況をうかがい知ることができます。

大垣市に限らず、国内では市街地の地下に貝殻層が発見されることがよくあります。これは、約6000年前、縄文海進とよばれる暖かい時期があり、海岸線が内陸の奥深くまで入り込んでいたためです。

大垣市では、JRの大垣駅付近に海岸線があったと考えられていますから、市内各地で地下から貝殻層が見つかって不思議ではありません。大型のマガキ化石は、県内では笠松町でも発見されています。こちらは、昭和10年、木曾川にかかる東海道線の橋梁工事において発見されたもので、笠松町の歴史民俗資料館に展示されています。

マガキは、その生息場所が沿岸部の浅海ですから、マガキの化石が発見されれば、その地層が堆積した当時、そこが沿岸部の浅海であったことが推定できます。このような化石は「示相化石」とよばれ、古環境の復元にとっても役立ちます。さて、岩礁に付着する通常のマガキはこのように長大にはなりません。化石となった大型のマガキは、現在のナガガキのように泥底の海底に生活していたのでしょうか。縄文海進当時、日本付近は温暖であったと考えられていますが、ナガガキは寒冷な海に適応したマガキです。化石のマガキを眺めて当時の様子を想像してみると、疑問が次々浮かんできます。



お知らせ



化石講演会

「日本の古生物学発祥の地 金生山」

- 日時 2月11日(月:祭日) 午後1時30分より 入場無料
- 会場 大垣市サイトピアセンター 学習館2F
- 講師 矢島 道子 先生 (東京医科歯科大学 等 非常勤講師 理学博士)
- 主催 金生山化石研究会 大垣市文化財保護協会 (共催)

入館者へプレゼント



1月2月に限り、ご入館の皆様へ方解石を提供しています。

サイズや形はそれぞれ異なります。お気に入りのものをお持ち帰りください。

尚、在庫が無くなり次第終了しますので、ご了解ください。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp